30. 障害の進行と情緒変化に対する調査

国立新潟療養所
五十嵐　節　子　　後　藤　静　江
桑　原　ち　よ　　渡　辺　キクノ
島　岡　康　子　　高　橋　紀　子
渡　辺　キエ子　　春　日　直　子
山　田　美津子　　小　林　なみ江
対　馬　ミ　ツ　　渡　辺　千恵子

〔目　　的〕

ＰＭＤ児の看護には、わざと尿器をひっくりかえす。屑籠を投げ歩く等の行動や「畜生」「ぶっ殺す」「ばかっチエツ」と舌打ちする。洗面拒否、拒食、等の反抗的態度にしばしば遭遇し、戸惑うことがある。

これらは病気の進行との関わりの中で、患児の内面にかくされた精神的苦痛に起因するものと考え、この苦痛を早期に知ることにより、側面的に援助できればと思い調査した。

〔調査方法〕

① 対　　象

A　入所後１年以内のＰＭＤ児６名

B　車椅子使用のＰＭＤ児６名

② 方　　法

A　児童指導員の記録、カルテ記録、面接

B　アンケート、カルテ記録、面接

③ 調査項目

A　入所後１年以内の情緒変化

○養護学校と入所前の学校の比較

○家と病棟との比較

○病気について

B　障害の進行に伴なう情緒変化

○歩行困難を自覚した時期

○転倒しはじめた時期

○歩行不能となった時期

○車椅子生活に移行した時期

〔結　　果〕

A　入所後1年以内の情緒変化

○学校との比較では、

通学困難、いじめっ子、友達ができない等の問題をあげ、同じ病気の友達のいる養護学校がよい。

○病棟生活については、

友達がいる、設備がよい、面会があるから寂しくない、先輩に用事をいいつけられるのは嫌だ、と言う。本当は家の方が良いが治療のため仕方がないと考えている。

○病気について

効く薬がない、進行している、早くなおりたい、と表現している。

B　障害の進行に伴なう情緒変化

○歩行困難を自覚しはじめた時期

思うように遊べなくてくやしい、何となく人と違うと思い訓練に励んだ等漠然とした不安が見られる。

○転倒しはじめた時期

病気から逃れたい、何くそ歩くぞ、歩きたい、病気のことは考えたくない等、ショックは大きく具体的不安となっている。

○歩行不能となった時期

歩行時の足すくい、看護婦にかみつく、暴言をはく、登校拒否、寂しくて家に帰りたい等のはげしい精神的動揺が認められる。

〔考　　察〕

以上の調査により最初は治療の場として家庭から離れて、不自由な病棟生活に耐えている。病状の進行により日常生活の行動が制限されると、はじめて自分の病気を真剣に考え、内面的葛藤がさまざまな言動としてあらわれる。そして車椅子生活に慣れて落ちつきを取りもどしている。

〔おわりに〕

今後、治療の場としての病院という期待が裏切られ、病気の予後を自覚し、病棟を全生活の場と自覚した時、私達はどのような援助をしたらよいのか、今後の課題にしたい。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔目的〕

PML 児の看護には、わざと尿器をひっくりかえす。屑籠を投げ歩く等の行動や「畜生」「ぶっ殺す」「ばかっチエツ」と舌打ちする。洗面拒否、拒食、等の反抗的態度にしばしば遭遇し、戸惑うことがある。

これらは病気の進行との関わりの中で、患児の内面にかくされた精神的苦痛に起因するものと考え、この苦痛を早期に知ることにより、側面的に援助できればと思い調査した。